劇づくりの実際

― 劇「うさぎとおばけ」(養護学級低学年組) ―

平岡陽子

1　低学年組における劇づくり

低学年においては，ことばの理解力や表現力が乏しい児童が多い。そのため劇中における登場人物の行動や感情を理解して表現したり，ことばのやりとりでその場の情景を表したりすることは難しい。また，劇づくりのように長時間に及ぶ学習では途中で飽きて学習意欲が低下し易いので，最後まで意欲的に学習に取り組めるような指導の工夫が必要である。発表を目標としてよりよい劇を作り上げるために，低学年組の劇づくりにおいては児童が常に楽しみながら学習していくことが大切であると考える。楽しく演じることで表現したいという意欲も生まれ，ひいては日常生活における表現活動が豊かになることに結びつくであろう。

以上のことと182ページの基本的仮説をふまえて本学級としての仮説を次のようにたてた。

仮説①……児童の日常生活に身近なもの（好きなもの，遊び等）を取り入れた劇であれば，児童は楽しみながら演じることができるので，表現意欲は高まり，学習意欲も持続するであろう。

仮説②……物語の学習と劇化の学習を併せて進めることにより，物語の理解も深まり，物語の内容を理解することが難しい児童も意欲的に学習に取り組めるであろう。

仮説③……身体動作や踊り，歌が多い劇であれば，表現することへの抵抗を柔げることにもなるので，児童の表現活動が活発になるであろう。

仮説④……１人１役で劇を演じ，お互いの演技を認め合うことを通して，集団の中の一員であるという自覚が高まるであろう。

2　題材「うさぎとおばけ」の決定

２年生の男児④は他校から転入してきたため，本学級の児童全員にとって今回が初めてのクリスマス会であり，初めての劇づくりでもある。そのため発表という目標によってだけでは学習意欲の持続を図ることは難しいであろうと考えた。そこで仮説①に基づいて児童の日常生活に身近なものを基盤とした劇づくりを進めていくことにした。まず児童の好きなものを考え，女児③が大好きな「うさぎ」と男児①がいつも話題にしたがる「おばけ」が登場することから題材を「うさぎとおばけ」に決めた。『劇あそび』（玉川大学出版部）の中の「うさぎとおばけ」を参考にしながら，本学級の児童の実態に合わせて内容を変えていった。児童が理解し易いように場面を２場面にしぼって話の筋を簡単にするとともに，男児④が学習に意欲的に取り組めるように登場人物の中に歯医者の役を加えた。この頃学級で流行っていた遊びの一つに歯医者さんごっこがあり，みんなと一緒に学習するのが苦手な男児④も積極的にこの遊びに参加して，友だちと役を交替しながら遊んでいたからである。低学年においては１人１役が児童の理解力や表現力に応じていると考えるので登場人物は４人にした。このようにして本学級の「うさぎとおばけ」ができ上がった。うさぎと友だちになりたいのに表現方法がまずいために寂しい思いをしているおばけが，やっと素直に自分の気持ちが言えてうさぎと友だちになれたという内容も低学年の児童の実態に合っていると考えた。自分の気持ちを誤った表現方法で表してしまうことは低学年の児童にはよくあることである。

〈粗筋〉

第一幕　うさぎの親子が野原を散歩しているとお母さんうさぎの歯が痛くなり，歯医者を呼んできて治療をしてもらう。みんなで森へいちごを取りに行くことにするが，その森にはお

ばけが出るという。「おばけなんてないさ……」と出かけた3人だったが……

第二幕　森に来るとあたりが暗くなり，草かげにおばけが登場。みんなは慌てて隠れる。おばけが「食べるぞ」と威かしていると，その後からもっと大きなおばけがやってくる。おばけは驚いて「もううさぎをいじめません。本当は友だちになりたかったんだ」と謝まるが，実は大おばけはうさぎのお母さんがシーツをかぶった姿だった。おばけとうさぎたちは仲良くなり，みんなで踊る。

3　指導にあたって

(1)　児童の実態と演技内容

上記の粗筋をもとに，児童の理解，表現，集団参加といった実態を考慮してシナリオを作成した。シナリオには児童が表出できることばや身体動作をできるだけ取り入れ，児童が安心感を持って活動できるように配慮した。各児の実態と，課題とした演技内容は次の通りである。

児童	実　　態	配役	演技内容（課題）
男児①	•絵本の読み聞かせやペープサート劇の視聴を好み，登場人物やおおまかな流れは理解できる。 •リズミカルな曲に合わせて踊ったりすることが得意である。 •集団の中では時々動けなくなることがある。	おばけ	•おばけの踊りを工夫して踊る。 •大おばけとのやりとりの場面を理解して演じる。
女児②	•物語の粗筋をつかみ，登場人物をあげることができる。 •発音が不明瞭ではあるが，文で話すことができる。 •身体動作の模倣はよくできる。 •世話好きで友だちの面倒をよくみる。	うさぎ母	•それぞれの情景に合った細かな演技をする。 （歯が痛い様子，怖がる様子，おばけのやりとり等） •女児③をリードしながら歩いたり，走ったりする。
女児③	•絵本の読み聞かせの視聴には集中しにくく，物語の内容の理解は難しい。 •毎日行なっている指あそびはそれらしくできる。 •表出言語は「でた」「ない」「はい」「おいで」「おいしい」「こっち」「いや」「いたい」ぐらいであとははっきりしていない。 •友だちの行動をよく見ていて友だちへの働きかけも多い。	うさぎ子	•「うさぎのうた」の踊りをそれらしく踊る。 •自分のせりふに合わせて歯医者を呼びに行く。 •女児②と一緒に逃げて隠れる。
男児④	•絵本の読み聞かせには興味を示さない。 •質問に対してオウム返しのような答が多いが，会話は成立する。 •男児①のまねをよくする。ごっこ遊びを好み，遊びの中で友だちにかかわろうとする姿がみられる。	うさぎ歯医者	•自分の言葉に合わせて登場し，歯の治療をする。 •みんなと一緒に逃げて隠れる。 •「うさぎのうた」を踊る。

(2)　学習の流れ

物語の内容を理解する学習だけでは学習意欲の低下につながる児童が多いため，仮説②に基づいて物語の学習と劇化の学習を併せて行なった。（計11時間）

時	物語の学習	劇化の学習	環　境（準備物）	場所
1時	◦昨年のＶＴＲを見て，クリスマス会で劇をすることを知る。 ◦「うさぎとおばけ」をすることを知る。		◦ＶＴＲ	教室
2時	◦ペープサート劇を視聴して，登場人物の確認をする。	◦配役を決定する。ペープサートの色塗り。 ◦「うさぎのうた」の歌の練習をする。	◦デンタルミラー ◦「うさぎの歌」テープ	〃
3時	◦教育実習生の劇（以下教生劇）を視聴して登場する場面を確認する。	◦配役を再確認する。 ◦「うさぎのうた」の踊りの練習をする。	◦効果音楽，踊りの歌のテープ	〃
4時	◦教生劇を視聴して大まかな動きの確認をする。（一幕） •クイズ形式で物語の内容を確認する。	◦大まかな動きをとらえる（一幕） •舞台の出入り　•演技する位置 ◦せりふの録音（個別）	◦歯医者の上衣，デンタルミラー ◦効果音楽，踊りの歌のテープ	舞台
5時	◦「うさぎのうた」の歌詞を理解する（紙しばい）	◦踊りの練習をする。 ◦せりふの録音（個別）	◦紙しばい ◦踊りの歌のテープ	教室
6時	◦教生劇を視聴して大まかな動きを確認する。（二幕）	◦大まかな動きをとらえる。（二幕） •舞台の出入り　•演技する位置 ◦せりふの録音（個別）	◦おばけの衣装 ◦歯医者の衣装，小道具 ◦効果音楽，踊りの歌のテープ	教室
7時	◦教生劇を視聴する。（一幕） （男児①欠席）	◦補助なしでテープに合わせて演技する。（一幕） ◦せりふの録音（個別）	◦教育実習生の声の編集テープ ◦歯医者の衣装・小道具	舞台
8時	◦教生劇を視聴する。（一・二幕） （男児①欠席）	◦一・二幕を通して演技する。	◦大道具，背景の絵，小道具 ◦照明をつける ◦教育実習生の声の編集テープ	〃
9時	◦教生劇を視聴する。（二幕） おばけと大おばけのやりとりを理解する。	◦細かな動きを練習する。（個別指導） ◦自分の声（編集テープ）に合わせて演技する。	◦衣装。◦大道具 ◦児童の声の編集テープ ◦照明をつける。	〃
10・11時		◦二幕の細かな動きを練習する。 ◦一・二幕を通して演技をする。	◦本番と同し環境で	〃

(3) クリスマス会に向けての意識づくり

前述したように本学級の児童にとっては初めてのクリスマス会である。クリスマス会までにはどんな学習をするのか，また当日の様子はどうであるかを知らせ，クリスマス会への期待を持たせるような学習が必要であると考えた。クリスマス会の学習の第一時では指導者はサンタクロースに扮してクリスマスソングをバックに児童の前に登場し，児童から「わぁ」という歓声があがった。サンタクロースの登場で児童はクリスマス会をとても楽しみにするようになった。特に男児④はクリスマス会に関する学習では他の学習ではみられないような意欲的な態度をみせていた。劇に関する学習は昨年のＶＴＲを見ることから始めたが，ＶＴＲを見ただけでは，女児②以外は「劇をする」というのがどういうことかわかっていないようだった。

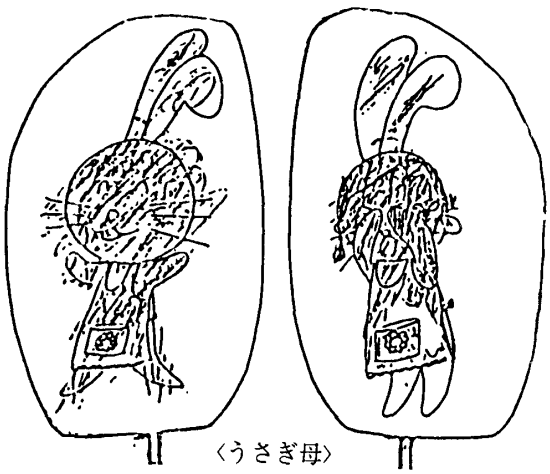
4 劇づくりの学習

(1) 物語の学習

女児③は理解が伴わないために，絵本や紙しばいの読み聞かせを集中して視聴することが難しい。また男児④も読み聞かせには興味を示さない。そこで今回は絵本や紙しばいを使わずに，ペープサート劇を視聴することから物語の学習に入った。ペープサート劇には動きがあるので女児③も男児④もよく視聴していた。ペープサートは図のように表裏で表情を変え，児童が扱い易い大きさのものを用意した。

〈うさぎ子〉

配役については児童の希望を聞いて決めたが，指導者のねらっていた通りになった。配役が決定した後，各児の役のペープサートの色塗りをさせて役の意識づけをした。それぞれ自分の役が気に入ったようで学習時間外にもペープサートを持ち歩く姿がみられた。劇づくりの学習中ずっとこのペープサートを役の意識を高めるために使った。

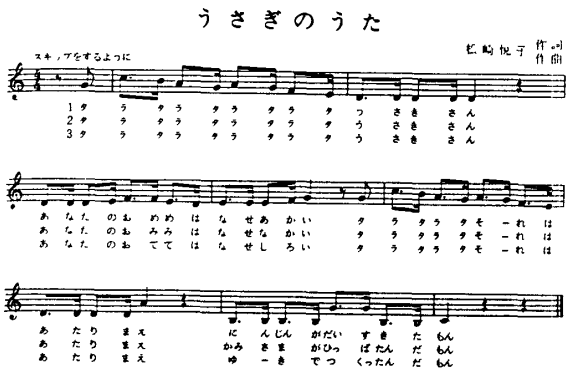


〈うさぎ母〉

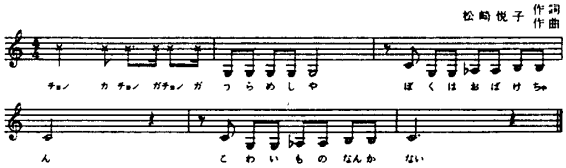
ペープサート劇では物語の粗筋は表現できても，細かい動きや表情の変化等を表現することができない。そこで第２時からは教育実習生による劇を視聴することで物語の学習を進めていった。劇を見せながら「○○ちゃんがする（演じる）△△だね。……してるね。」と１人１人に話しかけて，場面ごとの理解を深め，演技内容に注目させていった。

(2) 踊りの学習

児童はリズムに合わせて身体を動かすことが大好きである。劇中に歌や踊りが入ると，児童は楽しみながら演じることができるし，踊りは一つの見せ場にもなるので，見る側にとっても楽しいものである。今回の劇では３つの歌を取り入れた。「うさぎのうた」と「おばけなんてないさ」と「おばけのうた」である。その中の「うさぎのうた」を劇のテーマソングとし，簡単な踊りを振りつけた。劇化の学習はまずこの踊りの練習から取り組んだ。一番，二番，三番と歌詞が違い，それに合



おばけのうた



わせて振りつけも少しずつ違うのだが，歌詞を理解するための時間を一時間とり，簡単な紙しばいを見せて学習したことによって，踊りがしっかりしてきた。「うさぎのうた」の踊りは学習時間外にも踊るほど児童が気に入っていた。男児①と女児②はすぐに踊れるようになったし，女児③も練習を重ねるにつれてそれらしく踊れるようになった。男児④はこの踊りを初めて学習した日の翌朝，指導者の顔を見ながら「タラタ，タラッタ」と歌詞の一部を繰り返すので，指導者が歌うととてもうれしそうに聞いていた。男児④は曲の好みがはっきりしているので気にいるかどうか心配していたが，その様子をみて指導者も安心した。

「おばけのうた」はおばけ役の男児①が踊る歌である。この歌には振りつけをつけずに男児①に自由に踊らせた。男児①はリズムに合わせて踊るのは得意なので男児①の表現を生かしてやりたいと考えたからである。

(3) 演技の学習

演技は教育実習生の劇を見せることによって学ばせていった。女児③以外は見ることによって大体の動きをつかんでいた。演技内容を理解させるのに劇を見せて学ばせることは有効であったが，実際に児童が演技をする段階になると次の3点が問題になった。

① 場面ごとに出るタイミングがわからない。

② 舞台上で演技する位置がわからない。

③ おばけと大おばけのやりとりの場面の理解ができないために演技できない。

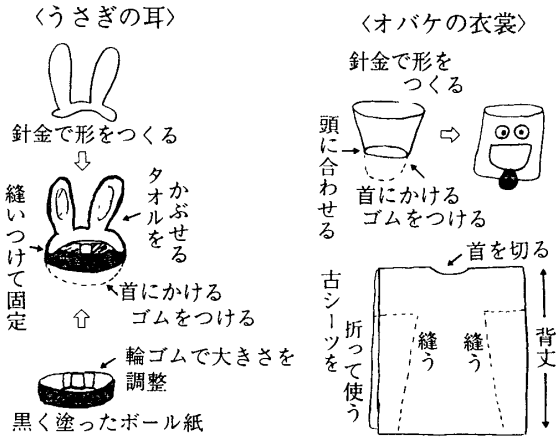
①については，演技用に編集したテープに，出るタイミングがわかるような音楽やことばを入れた。テープを聞きながら練習を重ねるにつれて出るタイミングをつかんでいった。

②については，舞台にビニールテープで印をつけて演技する位置を教えた。女児②がそれを理解できるようになったら，女児③に「こっちよ」と教えていた。歩いたり走ったりする演技では女児②が女児③の手をひいて行動していた。男児④には女児②と③について動くように指示した。

③については，何度も繰り返して教育実習生の演技を見せるとともに，やりとりのポイントとなることばとそれに伴う動きを押さえていった。

演技指導は，教育実習生が1人ずつ児童について指示する段階から，舞台の下から指示する段階，そして指示なしの段階へと発展させた。

また，飽きがこないように場や物を少しずつ変化させながら演技の学習を行なっていった。(186ページの表を参照) 教室での学習よりも合同教室の舞台の上での学習の方が，あるいは大道具，衣装，ライト等の環境が本番の様子に近づくにつれ児童の演技にも熱がこもってきた。その変化は特に男児④にみられた。最初は歯を治療する場面だけ演じていたが，ライトがついて大道具が入ると，舞台からおりずに一応全ての演技をするようになった。他児も衣装をつけるとはりきって演技をしていた。衣装の工夫した点を図で示す。うさぎの耳は練習中はボール紙で作った簡単な耳を使用した。男児④はデンタルミラーと歯医者の上衣を必ず身につけて学習に取り組んでいた。



5　当日の様子

当日児童はあがることもなく力いっぱい演技をし，最高のできであった。やはり観ている人が多い，しかも母親が観ているということは児童にとって大変励みになることであるようだ。各児の課題となっていた演技内容を全員が演じることができた。各児の当日の様子を簡単に次に記す。

男児①……緊張すると動けなくなる時があるので心配していたが，おばけの踊りを見事に演じてみんなから大拍手をもらった。大おばけに威かされひっくり返るのもタイミングよくできた。

女児②……劇中ずっと女児③のことを気づかって，手をひいたり，立つ位置の指示をしたりしていた。

女児③……歯医者を呼びに行くところがテープを聞きながらタイミングよくできた。踊りもとても可愛く踊れた。

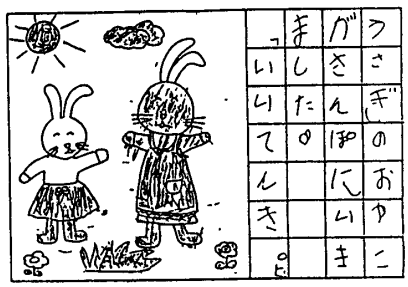
男児④……テープをよく聞きながら演技できた。おばけに威かされている間じっと隠れることができた。怖がっている様子も表現していた。

演技を終えて教室に戻った児童の顔がとても明るかった。どの児童も「やったぁ！」という満足そうな表情をしていた。

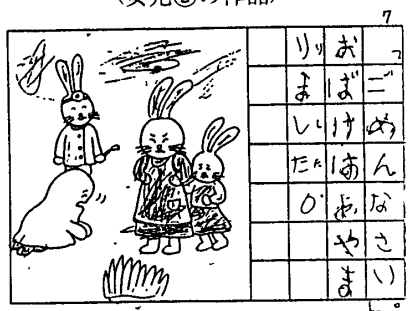
6　発展

(1)　絵本づくり

本学級は毎年冬休みの課題としてクリスマス会の劇の絵本づくりを行っている。劇づくりを通して内容の理解も深まっているし，楽しかった思いもあるので，書くことに対する抵抗が少なく，児童は喜んでこの絵本づくりに取り組んでいるようである。できた絵本を見ながら親子の会話が弾むことを指導者は願っている。絵本の文字の部分は児童の表記力の実態に合わせて視写及びなぞり書きにしている。絵の部分は色鉛筆での色塗りと，一部絵を描くページを作っている。右に絵本の一部を紹介する。女児③はなぞり書き，男児①と④は一部視写，女児②は別の紙に書いたものを視写させた。



〈女児②の作品〉

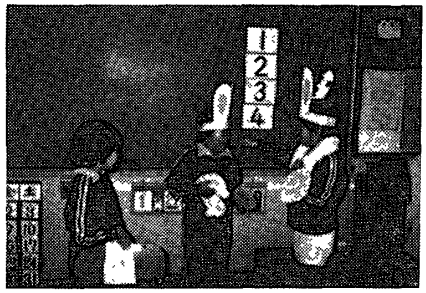


〈男児④の作品〉

(2)　遊びへの発展

女児②は劇づくりの途中から，家で１人４役をこなして劇を演じて遊んでいた。男児①も家族におばけの演技をほめられ，リクエストがあるたびにおばけの踊りを踊ってみせた。学校でもうさぎとおばけごっこの遊びが１月の今も続いている。特におばけと大おばけになって威かし合う遊びが児童に好まれている。そこで１月下旬のある日「うさぎとおばけ」の演技用編集テープを聞かせると女児②を中心にしてそれぞれの役を再現して遊んだ。指導者が驚くほどみんな演技内容をよく覚えていた。翌日男児④が「タラッタラッタしよう。」と言うので，テープをかけると，男児④はカーテンを閉め，みんなにそれぞれの役のペープサートやおばけになるためのタオルを配って歩いた。女児③が電気を消しに走って舞台の雰囲気づくりはでき上がり，女児②が監督になって劇あそびが始まった。指導者が口を出さなくても最後まで劇あそびが続いた。男児④がうれしそうに走りまわっているのが印象的だった。

(3) その他の発展



「うさぎのうた」のメロディーは児童にとって覚え易いものであったため，他の組の児童が歌っている姿もよくみかけた。また振りつけの中にジャンプするところがあったが，当時女児②はジャンプができなかった。歌に合わせて跳び上がろうとするのだが，足はまだ離れなかった。ところがクリスマス会が終わった頃からジャンプができるようになった。現在女児②は「うさぎのうた」に合わせてうれしそうにジャンプしている。

7 考察

(1) 仮説①について

男児④は練習中に舞台から降りることが何度かあったが，歯の治療の場面だけは必ず舞台に上がってきて演じていた。もし男児④の好きな歯医者の役を取り入れなかったら，劇づくりの最後まで学習意欲は続かなかったのではないだろうか。また男児①は日頃からおばけになって指導者を威かして楽しんでいた。そんな男児①であるから「おばけのうた」を工夫して踊ることができたのだと思う。児童の日常生活に身近なものを劇に取り入れることによって，表現意欲を高め，学習意欲を持続させることができたといえるであろう。

(2) 仮説②について

物語の学習と劇化の学習を併せて進めるということは，理解力が乏しい児童でも一時間のうちに一度は活躍する場があるということでもある。劇づくりの学習にはみんなが生き生きと意欲的に取り組んだ。また低学年においては，日頃大人が何げなく使っていることばを児童は理解していなかったというようなことも多い。ことばと物，あるいはことばと動作が結びついてこそ，そのことばを理解できたといえるであろう。そういった意味でも，動作をしながら理解を図る学習を進めていくことが大切である。

(3) 仮説③について

歌や踊りには心身を解放させる作用があるように思う。心や身体が解放されれば自ずと表現活動も活発に行なわれるようになる。「うさぎのうた」の踊りを楽しそうに踊っている児童の姿を見ていると，楽しいという思いが表現意欲につながっているように思われる。歌や踊りを取り入れることによって表現活動が活発になったといえる。

(4) 仮説④について

劇を作り上げていくうえで大切な役をこなしている１人なのだという自覚を児童に持たせる指導が大切である。お互いの演技を認め合うことによって，それぞれが集団を構成している１人なのだということに気づいたと思う。後の遊びにみられたように，児童がそれぞれ役割を分担して劇あそびの用意をし，指導者が指示や参加をしなくても劇あそびが進んでいく，そのような姿が指導者が目指していたものである。劇づくりを通して本学級の児童の仲間意識がより高まったと思う。

(5) その他について

表現意欲を高める要素の一つとして環境を整えることの重要性を痛感した。小道具，大道具，照明，衣装，それらの環境が充実してくるにつれ，児童の演技に対する取り組みも意欲的になっていった。観客がいて表現を認めてくれるという環境も児童にとって励みになることが当日の演技からよくわかる。表現意欲を起こさせ，それを高めていくための環境をいかに設定するかが今後の課題である。

参考文献　岡田　陽他著　幼児児童の創るシリーズ１　『劇あそび』玉川大学出版部